

## 市民とレクリエーション

特集

7

安永和夫

### 1 ————— はじめに

労働時間の短縮にともない、人間生活のなかに占める余暇時間が増大したといわれる。そしてその増加した余暇をどう活用すべきかを論じてレクリエーションが問題の中心へと進んできたのが「余暇善用」論といえよう。人間には言葉があり、言葉は魔術的なものを含んでいる。「余暇」は「何かのあまり」との意味を規定する。労働時間の減少によって増えるのが余暇であるという発想は、レクリエーションを本来的中心的なものから遠ざけて、人間生活の周縁的なものとして位置づける作用があった。

ところが、戦後の四半世紀はレクリエーションなり、余暇活動なりの意味を変化させてしまった。レクリエーションなり余暇活動なりが、人間の生活の構成要因の重要な部分を占めるものだという考え方を生み出したのである。人間生活自体の考え方が変わったために、「遊び」がなくては人間的な生活と考えられなくなったのである。すなわち、レクリエーションのない生活は人間生活として欠陥のある生活と理解されるようになった。このように、事実として変化していく余暇について、一般的市民のレクリエーションの見地より考案をすすめる、その望ましい将来像を描きだせば幸いである。

### 2 ————— 戦後と現在のレクリエーション

#### 1・戦後のレクリエーション

戦災の廃墟から、より豊かな生活の確立へと死物狂いの努力をつづけた日本人の生活には余暇などはなかったともいえよう。

しかし、人間の労働力にも、緊張維持にも限度がある。だれからも教えられずに休憩し気を抜き、

再生産のためのうつぶんばらしを行なってきた。あるいは宝くじの購入であったり、ラジオを通しての流行歌であったり、草野球であったり、観劇、小旅行であったりした。もちろんそれは個々人の経済力に応じてではあったが。

勤勉な日本人は、1週間のうち48時間の労働とその通勤時間を精一杯使って、忠実な労働生活を送り、それ以外の時間にささやかな楽しみ——パチンコ等を楽しむことのほかに、学習活動をはじめた。より多い収入をうるために特技を身につけることは、余暇時間の最高の利用方法であった。朝鮮戦争の頃までは「レクリエーション」すなわち「遊び」という考え方にいたらなかったといえよう。

## 2・経済成長と市民生活

国民生産高の向上と経済力の高揚という環境は、しだいに国民に余裕を与え、はじめて「遊び」こそ労働力の再生産に必要な不可欠な要素であるという考え方がでてきたのである。

神武景気、岩戸景気とよばれる好景気にもない国民の生活は向上し、現在にいたるまで国民の労働時間も減少してきた。レジャー産業はもっぱら週末の青年たちと子どもたちを吸収し、世は若者の天下の様相を呈するにいたった。戦前戦中の窮乏生活を経験してきた世代は、その消費的生活が身につかず、ふんだんと出まわる包装紙などを貯えたりして世代の違いを指摘された。いかえれば包装紙を貯めることがレクリエーションにもつながってきたのである。

国鉄・私鉄などの交通機関の発達と自動車産業の発展も国民のレクリエーションに多大の変化を与えた。年間数回の国内旅行——スキーや登山、海水浴、キャンプなど個人的なものから、商店街の団体旅行、大売出の景品としての招待旅行などが常識的になってきた。交通渋滞という新語を生ん

でもなおマイカーによる小旅行はさらに増加の一途をたどっている。

ジャンボジェット機の就航と万国博覧会開催とを契機に、海外旅行ブームが到来、農協やOLのグループなどが新聞や週刊誌に紹介されている。週刊誌とTVとはレジャー産業の最大のマスメディアであり、若者のみならず全国民が「他人のしていること」を知る機会を得始めたのである。経済的余裕、宣伝されたレジャー産業、この2点が国民のレクリエーションを「遊び」にと結びつけた。これに拍車をかけたのが、月賦販売やローン方式であり、年間6～8%の経済成長は貯めるよりは借りることの有利を教えている。

東京都知事のギャンブル廃止宣言は現代生活の1つの映像といえよう。かつては生活に豊かさをという夢を託した人びとが多かったが宣言のでる頃にはまさにギャンブルそのものを楽しみにしはじめたと考えられる。

以上一般的現象として市民生活をとらえるとき25年間の動き方が非常にはげしいことがわかる。そしてすべてが市民の労働時間をはなれた余暇の生活であり、レクリエーション活動である。

## 3・職域のレクリエーション活動

経済成長には各企業の労務管理の合理化も大きな影響をあたえていると考えられる。労働時間の短縮、職域環境の整備、厚生施設やその他の厚生関係の充実が働く者の生活を豊かにしはじめた。慰安旅行は会社側の手からはなれて労働者側の権利となった。厚生課の職員は会社側の生産向上への直接的な教育指導に対応して、人間生活の向上を目指して種々の計画を立て、実施しはじめた。大企業職域におけるレクリエーション活動は、一般市民のそれに比較できない程すすんできている。大企業の厚生活動の進歩は中小企業労働者にとって非常にうらやましい存在となり、中小企業の経

営者にとって人件費の増大を意味することになった。かくして、地方自治体がそれらの厚生活動を援助するという方向へと進み、勤労青少年ホームとか会館、キャンプ場という一連のレクリエーション施設が、要求に応じて建設されることとなった。

一見必然性をもって生まれてきたこのような施設は、実は人間性にとって非常に微妙な作用をしているのであって、ともすれば見落されがちな問題をふくんでいる。

要求して与えられた施設はそれを得たものの権利物となる。要求されて与え得ぬ企業が自治体などに援助を求める。議会の決定を得て税金がつかわれ、要求したものは曲りなりにも獲得出来る。要求一獲得という経過はそれ自体正当であるが、要求するものは権利として他人にそれを強要する結果を生み出す。税金は役人の金ではなく自分たちの金であることを主張するならば、他人の金であることを認めなければならないのであるが、濡れ手で粟を希望する乞食根性へと進んでいく可能性を見るのは考えすぎであろうか。

#### 4・家庭人のレクリエーション

主婦の労働時間は電化生活によって非常に短縮されたといわれる。経済成長による生活の合理化は無駄な時間を少くしたことは事実である。かくして教育ママとかPTAママが生まれ、パートで働く主婦が増加した。まさに余暇活動である。ところがその活動は経済的な豊かさを求めている労働や、子どもの将来への投資ともいえるものであって、婦人たちの自分自身の豊かさではないように思われてならない。

もちろん、ママさんバレーであるとか、成人学級というような、本格的なレクリエーション活動はさらに発展し充実していくであろうし、またそうあってほしいものである。

観点を変えて、風俗習慣のなかに主婦たちの生活の場を求めてみよう。正月元旦から大みそかまで日本古来の暦はまだ厳然と存在している。冠婚葬祭にしてもまたしかりである。

極暑の中の葬式や、満員のデパートでのお中元買物は家庭婦人の労働であろうか。年の暮のあわただしい大掃除が不合理なら年始まわりも旧世紀の遺物となってくる。イプセンの人形の家からとびだしたノラ——人間生活そのものをどう考えるかによって、常に習慣やしきたりとの相克が存在する。鎮守のお祭りは都市の中から消えさったが、子どもたちは宵宮を楽しみ、クリスチャンは増加しないがクリスマスパーティやプレゼントはあとをたたない。家庭人には労働と余暇といった区別対象は存在せず、生活自体があるといえるのではなからうか。

#### 5・失われつつある地域社会

都市化現象のまっただなかであって、市民の生活から地域社会が失われつつあるといわれる。エコノミックアニマルの名を得た日本人は、勤勉さの権化のように考えられている。会社員は会社に、主婦はその夫に、子どもは学校に忠実であり、誠実な律義ものがよき人間として評価されてきた。滅私奉公などという言葉のもつニュアンスである。その国民性を残しながら、忠実さ誠実さの対象物を失なったために、ひたすら家庭の殻にとじこもってしまった感じが強い。自己中心的な生活を至善とする風潮がみえるように思われてならない。とするとそのような人間の生きがいとするものは個人主義的小市民としての生活であろう。都市近郊のベッドタウンでは核家族をカタクナに守る都会人と、地域性を守りつづける土着人とのギャップが生まれている。

地域性の高い土地っ子は、地域自体を生活の場とし、町内会活動や子ども会活動などを当然のこと

として受け入れている。婦人部であれ青少年部であれ土地っ子がイニシャティブをとっている。都市より土地を求めてきた都会人にとっては、町内会も子供会も他者であり、利用できるかどうかを判断する対象物である。かくして地域社会はその本来的な姿を失いつつあり、レクリエーション活動は個人的商業的ないし家族単位のものへと変化して行く。鎮守のお祭りも商業的〇〇フェスティバルにとってかえられた。人間対人間の関係は一段と稀薄になっていくのである。

### 3 予想される姿とあるべき姿

#### 1・市民のレクリエーション活動の今後

戦後25年間の市民生活をレクリエーションの見地からふりかえてみた結果は前章のとおりであるが、今後のレクリエーション活動はどうなるであろうか。70年安保自動延長をめぐる各種の反体制活動は、日本人の政治意識をすこしでもやり起こそうとしたが、2千年の歴史をもつ国民性は無情にもその活動を無視してるかの感があり、体制は依然として体制である。そして国民の生活はより核家族的に、より都市化したものになっていくことであろう。レクリエーション活動も、それともなって旅行、TVなど対人関係を無視したものが盛んになるのではなからうか。

以上客観的に情況分析をした形で私見をのべたのであるが、拱手傍観するのは能のない話であり、よりよい社会生活への道をすみやかに進むためには、市町村ないし県や国の段階であらゆる可能な方法をとっていかねばならないと考える。

社会教育ないし社会体育の立場より、少年とか青年、成人、婦人、という分類でプログラムを展開し、たしかによい環境がつくられ、健康管理や知的向上は多大なものであった。レクリエーション

活動の啓蒙は正道をすすんだのである。そしていまやそれらの個々人のための社会教育、レクリエーション教育から、人間関係の教育へと変化すべき時期がきていると考える。市民の「ものの考え方」を「社会的」なものに変えるための活動を開始すべきである。これは家族対家族の交流を可能にならしめ、社会的地位を生活空間<住宅>からとりさって地域における平等な人間関係を確立させることである。会社社長という肩書きをもつ1人の男が、日曜日の夕方、隣に住むバスの運転手と将棋を楽しみ、夫人同志がカクテルを作り合うような一時をもてる……といった地域社会こそ、70年代の未来像である。人間は平等である。

#### 2・地域社会のかかわりあい

子供会、婦人会などの活動や体育指導委員などによる地域の諸活動が市民のレク活動へとつながっていくことは前にものべたが、これらが税金によってまかなわれるものであるという意識をどうとりのぞくかが今後の問題となろう。レク活動は自発的、自主的活動であることが本来的のものである。啓蒙の時期をすぎて、意識的に活動させるための手を打たねばならない。そもそも税金は社会的生活をよりよくするために自主的におさめるもので、国や自治体が国民に関係なく決め徴収するものとして意識されていることが問題である。一般社会からの脱落者には福祉の面で援助するのが適当だが、普通人のレク活動そのものに税金を消費することは行きすぎである。教育啓蒙の段階で当然と考えられたことを漫然とつづけていけば、それが習慣化し、健全なレクリエーション施設が商業ベースにのらなくなる。真の市民のレクリエーション活動を早く自分自身のものとすべきであろう。レクリエーションに金をかけることが無駄であるという価値観をうえつけないことに努力したいものである。

### 3・市民のレクリエーションの実際

YMCAの活動、事業を通して、市民のレクリエーションの実際を考察すると、まだまだ個人的色彩のものが多く、絵画、書道、音楽、茶道、華道という創作活動は、なんらかの形で人間の豊かさを身につけたいと念願するものである。YMCAにおいては、参加者相互間の話し合いやグループ化へと力をそそいでいるが、技術や奥儀を極めることへの集中が強い。

体育活動は益々盛んになってきている。柔道、合気道やボールゲームなどをはじめ体操そのもの、美容と健康を兼ねたトレーニングなどが新たに活発化している。それも、独身男性から女性へ、家庭の主婦へとその範囲は広がっていく。YMCAとしてはいかにこの要求に応じうる指導者を養成し、確保するかを考えている。これは施設があればよいというものではなく、指導者が必要であり、すでにボランティアの指導では間に合わなくなっている。果して地方自治体が、恒常的に指導体制を確立していけるであろうか。民間でプロフェッショナルリーダーを維持する経済力を確保させるためには、レクリエーションそのものの価値観を変えることが必要である。

最近の傾向として旅行の集団化があげられよう。航空会社の企画であれ、旅行業者のそれであれ、観光旅行の楽しみは十分果せるものであろう。しかしながら、これらも真の意味のレクリエーションからはちょっとはずれており、社会性の開発に近づける努力が必要と思われる。

教養講座的なプログラムへの参加をみると、一般市民の欲求は回を重ねるたびに变化していくことがわかる。日本文学や英文学の講義を通して講師の人生観にふれ、講座生の中に会話がかわされる。より幅の広い人間に接触する喜びをもつようになる。一般青年のみならず、家庭婦人の参加も増加しているのが現状である。講義そのものの

魅力とともに、同じ仲間との交流が喜ばれるのである。

幼児に対するプログラムを展開すると、その付添いとして母親が集まる。実験したわけではないが待合室では単なるおしゃべりではなく、手芸の技術交換などがはじまる。環境が設定されると自主的なレク活動が生れるのである。この点は地域の婦人会や子供会育成会の集まりでも同様である。要するに、個々の人間が、集団をつくっていく機会が必要なのである。

### 4・マスコミとレクリエーション

TV、ラジオ、新聞、週刊誌が市民をとりまいている。TVは子供と主人、新聞は主人と主婦、週刊誌はサラリーマンと学生、ラジオは自動車族と主婦と分類できるように思う。家庭電機は主婦の労働時間を減らしたが、TVだけはその余暇を奪い去ったといえよう。主人にしても学生や子どもにしても同様である。それがレクリエーションだとすればそれまでであるが、家事、勉強ないし休息の妨げになってはいないだろうか。さらにそれらのマスコミを通してコマーシャルがとびこんでくる。土地不動産から玩具、結婚式から海外旅行と市民の夢を刺戟してやまない。そしてそのコマーシャルが共通の知識、経験としておしゃべりのなかに登場する。このような環境に生活するものにとって、一切のコミュニケーションから隔離され、山の中で2日でも3日でも生活することができるならば、真のレクリエーションになるであろう。しかるに、現状は山のキャンプ場にも海の家にもカラーテレビがあり、ラジオが騒音を発している。なにをかいわんやである。山に登り、テントで眠り、鳥の声や虫の声を楽しむ生活、岩をつたい、波をよけて釣を楽しむ旅行には一切の都会的、文明的な騒がしさは不要である。自分の手で描き出すスケッチブックに、かきならすウクレレ

の音に、創造と美の世界がある。

#### 4———市民の創造活動

##### 1・技芸的創造活動

「市民の創造活動」とは職業人としての生産活動と対象されるもので、ひろい意味でレクリエーション活動のなかにとらえられるであろう。芸術—絵画、音楽、演劇、書道、手芸、彫刻、陶芸、等々。華道、茶道もその範ちゅうに入れてよいし、日本舞踊、バレエ等も創造的なものである。華道、茶道、書道等技芸に類するものの多くは市民にとって創造性よりも学習性、稽古事のイメージが強い。邦楽や舞踊にいたっては創造のイメージはほとんどない。きびしい訓練と師匠への授業料、あるいは免許料、看板料などが先に立ち、みずからの創作への道は遠く長いものの感がある。わびやさびを云々し、精神主義を重視することのほか、「教えることによって対貨を得るため」という、芸術の面からいえば不純な動機づけのため本来の創造性が失われている場合が多い。静かに松風を聞き、香り高い茶を味うのは、一人で物を思うのと同様、また数人の友とともに語り合う機会でもある。

このような次元に、経済的損得をもちこんでいくような行動はさけないものである。

##### 2・芸術的創造活動

絵画、手芸、彫刻、陶芸などは、プロフェッションとして成立しがたい芸術活動である。この点、前述のうらみは少ない。最初の手ほどきを受ければ、後は個人個人の修練であり、工夫であり、そういう意味で純粋な創造活動といえよう。完成された作品は他人にどんな評価をされようとも、創造した本人にとってはなにものにもかえがたい宝物

である。そして、知人友人への対話であり、心と心とのふれ合いに通じるものを含んでいる。作品は半永久的なものでもあり、気に入らなければ塵あくたと同様無価値のものともなる。

##### 3・演劇活動

創造活動のなかでは特異なものとして演劇活動がある。原本からつくり出す場合、原本をもとめて解釈、脚色からつくりあげる場合と段階の差こそあれ、人間の心理的な、抽象的なものを演技なり舞台、効果、せりふ、照明などあらゆるものを総合して表現するものであるが故に、高度の創造活動といえよう。原本の作者の意図することをどのように解釈するかが最初であるが、そこに生まれる1つの思想が、どれだけアクターと裏方とに徹底していくか、またその結果生まれる舞台そのものを通してその思想を観客に訴えられるかを問題としている。

横浜市内にも数多くの演劇サークルがあるが、劇団員も後援者も、また観客も一致した意識をもつ意義の深い活動である。ただ、劇団はいかに観客を動員するかという点と、発表の場所〈劇場〉をいかに安く借りるかの点に苦心している。一方一般市民は、商業主義の娯楽劇や映画に安易なレクリエーションをもとめている。さらに悪いことには、テレビタレントへのあこがれ——チャンスを手掴んでスターダムへと考える人が生れてくる。そこには目でみて「おかしい」とか「きれいだ」、「かっこいい」という表面的なもの、模倣的なもののみがあつて創造活動とはいえずものがファクターとして存在している。

英国のシェイクスピア劇などが地域社会に支持されたり、フランス、オーストリアの音楽劇などのように、大衆的にかつ創造的な演劇活動がさらに活発化してほしいものである。

#### 4・日曜大工とその背景

技芸、芸術、演劇とについて創造活動を考察したが、市民にとってもっとも身近な創造活動は日常生活に密着した日曜大工的な活動であろう。家庭生活をより合理化し、豊かにするための工作、塗装、あるいは園芸のたぐいである。士農工商の徳川時代を終って約一世紀の間、経済力のあるものが金で植木屋を、大工をやとって整備してきたが、最近はずみずから手でその作業を始める風潮がみえてきた。この背景には、過去において非常に安かった人件費がインフレにともない高くなった事実がある。アメリカないしカナダなどの生活をみると、家の建築からしてハーフメイドであり住人が数年、数十年かけて床をはりカベを塗っていることがわかる。他人まかせにせぬ自立心ともいえようが、会社員たちは事務の疲れをそのような創造活動でいやしている。日本ではまだ小数であるが、父親のへたなのこぎり扱いを見て息子達が真似をする時期があり、やがてその息子たちはあざやかな手つきで自分の家を改造していく時代になるであろう。祖父母から父母へ、子へ孫へと伝わっていく生活の知恵を大いに活用していくべきである。

### 5———こどもたちとレクリエーション

#### 1・青少年指導とレクリエーション

「こどもを大切に市政」とともに子ども会ないし青少年指導に大きな力が加えられてきたが、必らずといえるほどすべての青少年活動にレクリエーションという言葉がくっついてまわる。端的にいえばこの場合のレクリエーションはゲームでありソングであると断言できる。なるほどゲームもソングもレクリエーション活動にはちがいないが、現在では幕間狂言的な、つなぎ的なものとい

う解釈が一般化している。大人の生活ですら生活の一部として遊びが必要と考えられるのであるから、こどもに対してもゲームやソングをすることでレクリエーションがすんだという考え方は不適當である。生活訓練、生活指導とよばれる行動はゲーム化されてはじめてこどもに受入れられるのであって、「お話がすんだからゲームをしましょう」的なレクリエーションの考え方はさげねばならない。学校生活をはなれ、家庭生活をはなれたこどもたちの行動は、大人にとってはレクリエーション的にとらえられるが、彼らにとっては生活の一部である。やたらに「レクリエーションをしましょう」という言葉は使いたくないものである。「ゲームをしましょう」「歌をうたいましょう」と語りかけてしかるべきである。

#### 2・ゲームとこどもたちの遊び

こどもにとって遊びは生活そのものである。数人のこどもたちがあつまって遊ぶ場合、彼らは遊びのルールを作り、そのルールに従って遊ぶ自発的な行動である。ところが、「ゲームをしよう」といってルールを説明し、理解させて指導のもとに行うゲームは彼らにとって遊びではない。「ゲーム」という生活訓練である。レクリエーション指導者は、遊びのなかに訓練を、可能性の開発を念じて指導すべきであろう。時と場合によっては、こどもたちの自発性をほんの少しひき出す努力をし、うまくひき出したならば、あとはこどもたち自身の力で動かしていく。集団の形態によってゲームそのものを教え、遊び方を教えねばならぬ場面もある。行きすぎたゲーム指導は、指導されねば遊べないかたわなこどもをつくりだすおそれがある。

#### 3・青少年指導者とレクリエーション指導者

市内に二千名近い青少年指導者が、委嘱されてい

る。行政的には指導者として委嘱しある時は研修を行なっている。この人達は子どもたちを見守り助言し、青少年活動を社会的にPRし、そしてなんらかの形で青少年のための行事を実施する人びとである。レクリエーション指導者は、ゲームやソング、野外活動や体育活動の実技の指導技術をもっている人であると考えられているように思われる。おそらくこれは事実であって、市青少年巡回指導者協会に派遣依頼をする青少年指導員は、技術指導を頼む例が多い。協会ではなんとかして青少年指導員、子ども会指導者の人びとが、実技指導の技術を身につけて欲しいと願っており、青少年の家集中指導等を実施している。考え方と実技とが相まって、秀れた指導者が生まれてくるのである。

#### 4・過保護とレクリエーション

「子どもを大切にする」運動とは別に、経済的余裕からか、過保護なる言葉が生まれてくるほど子どもの環境が変化した。欲しがるおもちゃは買いあたえられ、テレビや週刊誌も十分すぎるほど普及している。興味をひくテレビ漫画はいつしか子ども達を縛りつけ、週刊誌は学習の時間を奪い、教育ママはやりくりの結果、遊びの時間をそれにあてはじめた。子どもたちの自由な時間はどんどん減って、睡眠時間すらその危機にきている。心ある父母は、テレビのチャンネル権を奪い合う子どもをつくることではなく、スイッチ権を保留することを考えている。現状の環境をそのまま認めるとしたならば、子どもたちの真のレクリエーションはそのような環境からとび出して、自由自在に動けるようにすることであろう。暑くなっても上衣やセーターをぬぐことをしない子どもたちは過保護の悲劇である。

なにか無理に市民のレクリエーションに関してあらゆる分野からつつき廻した感じであるが、考えてみれば市民生活そのものについて書かねばならないのであるからいたし方ない。レクリエーションの考え方が全市民に行きわたることを望み、現状と今後のあるべき姿をよみとっていただければ幸いと考える。要は市民全般が、あまり高望みをしないで分に応じた経済力で、生きがいのある生活を楽しむことを考え、人間ひとり立たずとして地域社会に奉仕し、社会生活を豊かにすることに努力する気持になることである。「乃公出でずんば」の出世主義や英雄主義にひきづられすぎないでほしいものである。

<横浜YMCA主事・横浜市青少年巡回指導者協会々員>